

豊後の武将、宗像掃部鎮統

大友吉統の重臣

矢島 嗣久

宗像掃部鎮統（鎮統）は豊後の大友吉統（義統）の重臣で、慶長五年（一六〇〇）の石垣原合戦にて討ち死にしている。

宗像掃部の出自ははっきりしていないが、おそらく福岡県の宗像神社からの一族であると思われる。

一 宗像鎮統

宗像鎮統の出生？一六〇〇年（慶長五年）死去、掃部助、天正十四年（一五八六）から文禄二年（一五九三）の豊後国除まで大友義統の加判衆。天正十五年（一五九三）に黒田孝高に勧められ、義統とともにキリスト教を受洗している。同二十年（一五九二）、文禄の役に義統の子義述の側近として、肥前名護屋に在陣した。文禄二年、大友氏国除後は豊後岡藩（現竹田市）の中川秀成に仕え、慶長五年（一六〇〇）九月、関ヶ原合戦に際し、大友義統が西軍に参加したためこれに従う。

このため豊後石垣原（現別府市）で黒田如水の軍勢と戦い討死する。

鎮統（天正五年・一五七七）・掃部助（天正十五年）と称す。天正十四年（一五八六）十二月から文禄二年（一五九三）国除まで義統の加判衆を勤める。加判衆とは、家老と同義、または家柄・家格の名称として用いられることがあった。加判とは、評定所（会所）などの重臣会議に出席資格がある者に与えられる職名として、用いられることがある。この場合は、家老職が加判であることは、加判の列とも呼び、本来の意味は主君の上意を執行するにあたって、署名・押捺を行う職権を有する重臣をいう。戦国時代末期からよく見られるようになった語であるが、起源は鎌倉幕府の連署である。

天正五年（一五七七）、宗像掃部が由原宮造替木屋夫につき宿老に対し、自領が少領・河成のため詫言している。河成とは河川に沿って分布する階段状の台地地形で、平たんな台地面（段丘面）と急傾斜の崖（段丘崖）からなる。河川によって形成されたことを強調して、河成段丘ともよぶ。

天正十一年（一五八三）頃大坂普請夫を出す。天正十二、三年頃から大友義統の側近にあっらしい。十五年（一五八七）四月、黒田如水の勧めにより妙見岳城で義統と

共に受洗（フロイス「日本史」）。妙見岳城は豊前国宇佐郡、現在の大分県宇佐市院内町香下の妙見岳山頂（標高四四四メートル）にあった。

天正十六年（一五八七）六月二日（同閏五月）、大友義統の命で狭間鎮秀を湯布院において誅伐した。狭間鎮秀の墓は、湯布院町大字川上津江にあり。天正十七年（一五八九）、鎮続の息子と高橋元種の娘との縁談が起るが、破談となる。高橋元種は、元龜二年（一五七一）生まれ、慶長十九年（一六一四）死去。筑前秋月種実の二男。豊前香春岳領主高橋鑑種の養子。のち日向臼杵郡に延岡城を築く。その後徳川幕府から改易となる。

二 薩摩軍の豊後侵入と狭間鎮秀

天正六年（一五七八）の大友軍の日向侵攻の失敗は、天正十四年（一五八六）の薩摩軍の豊後侵入を招いた。島津軍は日向から梓峠（佐伯市宇目町）を越えて大野郡に入った島津家久軍と、肥後から直入郡に入り朽網に本陣を敷いた義弘（家久の父）軍の二隊に分れて豊後に入ってきた。狭間に入り、狭間鎮秀と対決したのは朽網に本陣を構えた義弘軍であった。

「西治録」は「薩兵府城を攻落事」の項で、大友義統が戸次河原の合戦で大敗したあと高崎城に入り、さらに宇佐郡龍王城に敗走するにあたって、狭間山城守鎮秀を高崎城に留めたと述べている。

「豊後国志」の船箇尾城の記事では、天正の合戦で風早因幡・斎藤将監の守る船箇尾城を新納久将が攻め、両人を戦死させたとある。船箇尾城の説明は、城將大津留鎮益は橋爪某と共に大友義統に従って豊前竜王城にあり、武宮親実が臼杵城に入っていた。従って、三家支族が船箇尾城に入りこれを守ったという。また、「大津留氏の妻が島津軍の進攻を恐れ自殺してしまった。そのため兵は城を棄て去ったともいう」としている。

龍原村の権現嶽城については、狭間鎮秀が入り、燕鳥嶽に支城を構えて平松・



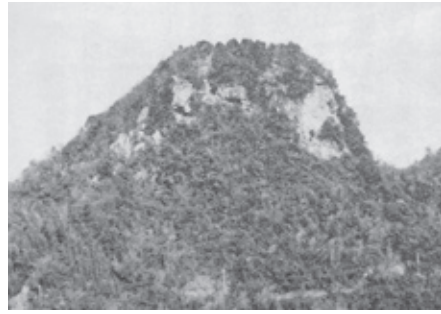
龍王城



高崎山城

向井二氏を入れた。新納久将以下数千は阿南諸城を陥れ、権現嶽城に迫った。城兵では奇策をもって有利に戦ったため、島津軍は夜に入つて遁走したという。

「西治録」によれば、島津義弘は兵を三手に分け、一手は自身が率い、他は新納忠元



権現岳城跡

を将とする玖珠攻略隊と新納久将の庄内攻略隊としたという。天正十四年（一五八六）十二月七日、久将隊は船ヶ尾城に押し寄せた。敵味方の合戦中に、内応者が城に火を放った。

武宮辻台ノ城・橋爪鳥鼻ノ城に入つて居た郷士武士たちは、大津留河内守鎮益しんぎの松ヶ尾城に入った。松ヶ尾城に押し寄せた島津軍は、松ヶ尾城の攻撃から引き揚げ、翌日は狭間鎮秀の籠る権現嶽山城に向つた。島津軍はここも数日後、引き揚げた。島津義弘が府内（現大分市）に向つた。三月十四日付け史料には、武宮から府中（現大分市）に向つた義弘軍に、手切れした鎮秀が攻め架かり、死証（島津武士の首）九を届けたとある。

天正十四年十二月三日から翌年正月に十四日頃まで由布院で戦いが行われている。

「大友家文書録」には天正二十六年の条に、「吉統、家臣狭間山城守かつて薩兵に党くみすを責め、宗像掃部助鎮統・大津留民部少輔に命じてこれを討つ。怒留湯長門守・荒木治右衛門等またこの事に預（攻略）」と説明した後、天正十六年閏五月二十六日付け怒留湯長門守あて大友吉統書状を収めている。

三 豊後除国

文禄二年（一五九三）一月、大友吉統（義統）は朝鮮の役の際、敵前逃亡の失敗をしてしまった。

同年五月、豊臣秀吉が吉統を罰し、豊後国を没収して蔵入分（秀吉の直轄地）とし、吉統の身柄を毛利輝元に預け、吉統の嫡子義乗よしのりは五百人扶持とし加藤清正に従わせる。田原紹忍の所領も没収された。毛利輝元は毛利元就の孫に当たる。

吉統は一年ばかり山口に幽閉された後、文禄三年九月には水戸の佐竹義宣よしのりのもとに移された。水戸へ移された理由は、大友の旧臣たちが山口に幽閉されている吉統のもとへ訪ねてくるのを避けるためであった。

文禄三年（一五九四）二月頃、秀吉が豊後を諸将に分ち、中川秀成には直入郡岡城（現竹田市）七万石を宛てがった。

大友家の旧臣で、宗麟・吉統の筆頭家老であった田原紹忍親賢と宗像掃部鎮統が岡藩中川家の客分与力（被官の武士）となっていた。吉統から豊後国を取り上げた秀吉が、朝鮮の役（えき）のとき、豊後を守っていた田原紹忍親賢には岡領（かしわばる）柏原松本村（現竹田市荻町、中央部）二千九百石、宗像掃部鎮統には葎原郷（むぐらぼろ）（現竹田市荻町馬場内、中央北部）一千八百五十石余を特別に与えていた。

文禄の役、文禄元年（一五九二）では、宗像掃部が大友義統の子義述（よしのぶ）に供奉（くぶ）して肥前名護屋に在陣。田原親賢、宗像掃部は朝鮮侵攻の際、渡鮮しなかった。肥前名護屋城（肥前国松浦郡）は現在の佐賀県唐津市（旧唐津市鎮西町・呼子町）にあった城である。豊臣秀吉の命令で朝鮮国侵攻の前衛基地の城として建設された。

文禄二年（一五九三）、豊後の国除後、秀吉は田原紹忍親賢に三千石、宗像鎮統に二千石を与え、豊後岡領（現竹田市）の中川秀成（ひでしげ）の与力とする。

四 石垣原合戦

慶長五年（一六〇〇）九月九日、大友吉統の豊後国入りに併せて、田原紹忍親賢・宗像掃部鎮統は中川氏の紋旗をもつて石垣原陣に入る。豊後岡領の中川氏の紋旗は「中川クルス」という。

大友義統・黒田・中川・加藤氏の間の

事前の話では大友は東軍方と内談されていたが、義銃

が豹変して西軍となる。宗像鎮統は大友吉統（義統）に殉じ、九月十三日、左翼を指揮して石垣原で黒田如水軍と戦い、戦死した。

鎌倉期〜戦国末期に見える城名、豊後国大分郡阿南荘のうち現在の大分川の支流芹川の右岸、大分川との合流点から約一キロメートル上流の大分郡庄内町大字竜原猿渡に所在した通称は城山。大友庶子家狭間氏（ま）が拠った狭間氏初代直重（なむしげ）は、大



大友吉統



中川クルス

友二代親秀ちかひでの四男として生れ、文永の役に出陣、恩賞として狭間村を賜り、以後代々狭間村に居を構えた（狭間家譜／県史料二六）狭間氏は、「弘安凶田帳」によると、阿南莊地頭職を大友惣領家とともに帯し、また松富まつとみ名三十五町の地頭職を帯している（大友史料三）。狭間氏の系図によると、初代直重なおしげが阿南郷竜原村権現岳たつばるに城を構えたと見えるが、裏付ける史料はない。おそらく後世の作為によるものであろう。十七代狭間山城守鎮秀しげひでが、天正十四年（一五八六年）島津軍襲来の時、権現岳に籠城して攻守、節を全うした（狭間文書／県史料二六）。「豊後国志」には、天正の役の時、狭間鎮秀が拠り、支城を燕鳥岳つばくろに構え、平松・向井の二子をして守らしめた。島津軍は新納にいろう氏を大将にして数千で攻略したが、ついに落とし得なかった。また、天正十四年の薩兵侵入に当たり、狭間鎮秀が初めて砦を構えたともある（庄内町二十年のあゆみ）。

鳥屋城跡、豊後大野市
朝地町鳥田の城山（標高



大友吉統本陣跡

七七四・二m）、鳥屋城は延応二年（一二四〇年）ごろ、大友氏の初代当主、能直よしなおの六男時景ときかげ（景直かげなお）が築城したとされるが、詳細は不明。時景の子、光景みつかげから一万田姓となり、一万田氏は四百年近く城を治めた。

しかし、一五八六年（天正十四年）、島津軍が豊後国に侵攻してきた際、一万田氏は島津側に付いた。後に大友宗麟に呼び出され切腹となり、宗像掃部鎮統かみんしげつぐが城主となった。鎮統は慶長五年（一六〇〇）の石垣原の戦いで大友軍の左翼（別府市堀田、御堂ヶ原）の大将を務めたが討ち死にした。

石垣原合戦にて宗像掃部の軍が黒田軍の久野治左衛門、十九歳とその後見人、曾我部五右衛門、五十三歳を討ち取った。その後、久野、曾我部の部下達が宗像掃部及び都甲兵部を返り討ちにした。都甲兵部は杵築城内にて大友方と内通していた。

文禄二年（一五九三）、鳥屋城は大友氏の滅亡と併せて廃城



宗像掃部陣所跡

になった。

大分合同新聞、朝刊、二〇一四年（平成二十六年）六月二十六日（木）十四ページ、参照。鳥屋城跡は国道四四二号線の東側、神角寺（標高七三〇m）の西側にある。最近、有志達により城跡への登山道が整備されている。

九月十三日、石垣原合戦は正午頃始まって、夕刻、黒田、細川連合軍が勝利し、大友軍が敗れた。大友吉統は堀田の海雲寺にて剃髪、墨染めの衣を着て、夜陰に紛れ黒田如水の陣へ出頭した。

大友立石黒田実相寺山陣 石垣原合戦之次第覚事 久我四郎三郎

石垣原合戦日記 慶長六丑二月十五日 認之 久我四郎三郎
古屋彦助殿

によれば、文の最後に

一 右前断之名前統一向不分 宗像君之近習耆人僧卜成 鶴見嶽法印之弟子ニテ世ヲノカレ居タル人ニ委敷聞ク附留候

但 俗名野原用助治重 僧名善学坊嶽宝泉坊弟子也

此節 拙者儀ハ平畑ニ隠レ居候故杵築エ不参相済 軍之様子見度候得共万一

杵築エ参候様可相成と心得平畑之奥ヨリ不出隠住居申候

慶長六年丑二月十五日 認之

小屋彦助殿

久我四郎三郎

ここに書いた話は、当時、大友方の武将宗像掃部鎮統の近習野原用助治重より聞いた話である。その者は現在、鶴見嶽法印のもので、仏門に入り僧となって亡き主君を弔っており、僧名は善学坊と云う。（古屋家に伝わる口伝では著者久我氏は宗形掃部一族との事）

以上の文書は合戦当時の庄屋、古屋彦助宅に宿陣した大友義統（古統）が本陣とした古屋家に残されている古屋家文書である。

この古屋家文書は、



宗像掃部陣所跡

慶長五年九月十三日に行われた石垣原合戦から五ヶ月後、翌年の二月に書かれたものである。

五 宗像掃部鎮統の墓

以前、宗像掃部の墓は別府市南立石本町の道路の北側、荒金氏宅の庭先の北側にあつたが平成二十四年（二〇一三）一月、堀田天満天神宮境内に遷座されている。向って左側に古い五輪の塔があり、これが宗像掃部の墓である。

その墓石の右側には江戸期に作成されたと思われる 家形の石の祠が数基有り、これらは宗像氏の子孫が作成して供えたものである。墓石群の手前には、昭和四十七年（一九七二）七月に建立された鳥居も移設されている。



宗像掃部の墓

この墓は吉弘神社境内にある吉弘統幸の墓と共に、別府市の文化財として指定されている。

挟間史談の会長、二宮修二氏のインターネットによれば、「現在、挟間鎮秀の墓は湯布院と挟間にある。供養塔に至っては、池ノ上の慶福寺・龍祥寺墓地・向原の光源地藏庵と三つある」と記されている。

引用参考文献

『挟間町誌』昭和五十九年十月 挟間町

『庄内町誌』平成二年十月 庄内町

『戦国人名事典』編者 阿部 猛、西村圭子

昭和六十二年三月十日、発行所 新人物往来社

『戦国大名家臣団事典』西国編 山本 大、小和田哲男

昭和六十一年九月、発行所 新人物往来社

『挟間史談』第四号 二〇一四年 挟間史談会

挟間龍祥寺と別府宝泉寺 矢島嗣久

『別府史談』一九九九年 第十三号

大友吉統重臣 田原紹忍親賢について 矢島嗣久

『別府史談』一九九二年 第六号

古屋家文書「石垣原合戦日記」について 安部和也

（掲載の写真は必要によって画像処理をしました。）